

■ ショパン／ピアノ協奏曲第1番 木短調 Op.11

ショパン・コンクールの本選会でおなじみのピアノ協奏曲第1番木短調はフレデリック・ショパン(1810-49)が20歳の時に作曲された。ワルシャワ音楽院を卒業後まもなく、友人と訪れたウィーンの演奏会で自作を披露して好評を得ると、さっそく自分で弾くためのピアノ協奏曲に取り掛かったのである。相次いで2曲の協奏曲を手がけ、第2番に続いて作曲された第1番は政情が不安定なポーランドを離れて音楽の道を極めようと決意したショパンの、ワルシャワでのお別れ演奏会で初演された。

若いころの作品らしく、楽曲の構成は古典的だ。第1楽章の冒頭、オーケストラが第1主題、第2主題を提示したのちにピアノの提示部となる。チャイコフスキーの第1番のように短い序奏に続いてピアノの和音に乗せて第1主題が奏でられるものや、リストの第1番のようにオーケストラによる主題の提示を受けて華麗なカデンツァ風の独奏へ流れこむものなど、始まってまもなくピアノが登場する曲とは大きく異なっている。ショパンのオーケストレーションが当時は未熟だったと指摘されることも多く、ピアノが入るまでの長い提示部は指揮者の腕の見せどころと言ってもよさそうだ。第2楽章「ロマンツァ」は弱音器をつけたヴァイオリンによる序奏のあと、ピアノが優しく歌う緩徐楽章。第3楽章は軽妙なロンド。短い序奏ののち、ピアノがロンド主題を華麗に弾く。晴れやかで気品のあふれるフィナーレである。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、バストロンボーン、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

※スコア上の表記